

## Shakespeare Journal 論文・記事執筆要領

2013年10月10日一部改訂

2015年4月25日一部改訂

2017年4月4日一部改訂

投稿論文は日本語論文とし、原稿の長さは6,000～12,000字とする。これには注も含まれるが、引用文献は字数に含まない。引用や引用文献の書き方は原則として、Joseph Gibaldi, ed. *MLA Handbook for Writers of Research Papers*, 7th ed. (New York: Modern Language Association of America, 2009) に準ずる。

### 1. 全体の書式上の注意

- ・原稿で使用するフォントは、日本語では MS 明朝、英語では Century、ポイントはいずれも 10.5 とする。
- ・半角丸括弧を使用する場合には、前後に半角スペースを置くが、括弧の前後に角括弧や句読点がある場合はこの限りではない。
- ・作品名は、日本語訳を 2 重括弧 (『 』) で表記し、引用文献に記載されていない場合、初出時には半角丸括弧で括って原綴りを挿入する。作品名の日本語訳は、原則として、高橋康也ほか編、『研究社シェイクスピア事典』(研究社、2000年)の表記に準ずる。
- ・論文は節に分け、各節に番号と見出しを付けることが望ましい。節番号と見出しは中央揃えではなく、左揃えで書く。
- ・論文や記事の副題を表すダッシュは全角 2 文字分用い、副題の前後に付ける。

### 2. 数字表記の統一について

- (1) 数詞は、原則としてアラビア数字(半角)で表記する。小見出しの番号も、これに含まれる。  
(例)「第 2 幕第 3 場」、「第 2 話」、「第 3 部」、「1623 年」、「20 年間」、「天保 12 年」、「4 月 22 日」、「17 世紀」、「12 名の団員」、「100 人の騎士」、「14 歳」、「双子の兄弟の 1 人」、「1 ページ目」、「第 3 の劇場」、「第 2 版」、「6 ポンド」、「悲劇 6 本を上演」、「2 代目レノックス公」、「4 分の 3」、「1 行 10 音節」、「6 行を 1 連とし、全 199 連 1194 行からなる物語詩」、「5 つの母音」

(2) ただし、次の場合は漢数字を用いる。

#### ①固有名詞(人名、地名)

(例)「ヘンリー五世」、「ルイ十一世」、「『ヘンリー六世』」(例:『ヘンリー六世』・第 2 部)、「港区六本木」、「中央区六本松」

#### ②成句、熟語、あるいは成句・熟語の一部として定着しているもの

(例)「一人娘」、「二人兄弟」、「二本足」、「三人姉妹」、「裕福な一家」、「一人前」、「一人芝居」、「二大劇団」、「四大元素」、「同一人物」、「二人三脚」、「二人羽織」、「三人称」、「第三者」、「三位一体」、「人っ子一人いない」、「一人(独り)暮らし」、「数千行」(例:3万数千行に及ぶ大作)、「五十歩百歩」、「百代の過客」、「百聞は一見に如かず」、「五十肩」、「六十路」、「四字熟語」(例:四字熟語は、漢字 4 字で構成される)、「十二夜」(例:十二夜とは、12 日目の十二日節の晩)、「四つ折本」(例:20 篇の四つ折本)、「二つ折本」(例:第 1・二つ折本)、「五月柱」、「二行連句」(例:二行連句は、押韻する同数の音節からなる 2 行)、「第二次世界大戦」、「歌詞の一部」(cf.『ヘンリー四世』の第 1 部)、「一部始終」、「三部作」(例:『ヘンリー六世』三部作)

(3) アラビア数字にすべきか漢数字にすべきかの線引きが難しい事例については、執筆者の判断に委

ねる。

### 3. 人名表記について

- (1) 文学作品の登場人物名はカタカナで表記する。原綴りは不要。
- (2) 実在人物の人名もカタカナで表記する。初出箇所のみフル・ネーム表記する。引用文献に記載のないもの場合のみ、「リチャード・フッカー (Richard Hooker)」のように半角丸括弧で括って原綴りを初出時に挿入する。

### 4. 引用について

- (1) 4行以上の長い引用の場合には、前後に1行ずつ空行を取る。左インデントは全角3文字分取る。
- (2) 3行以内の短い引用は原則として地の文に挿入する。読みやすさを考えて日本語に直すことが望ましい。その際、「」で括った引用文中に元々「」がある場合には、『』に変更する。原文の併記が必要な場合は、半角括弧に括って日本語引用文のあと（「」内に）に記載する。
- (3) 地の文のなかに原文のみを引用する場合は、double quotation marks を用いる。
- (4) 引用の後ろには、半角丸括弧で括って、引用文献で出典が確認できるように、(Sanders 147)のように筆者のファミリー・ネームの原綴りとページを表記する。ページを表す p.や pp.は使用しない。半角丸括弧を文末に付けるときには、「(Sanders 147).」のように、句点の前に付ける。
- (5) 戯曲の引用の幕・場・行は、(2.2.125-26)のように、半角丸括弧で括って半角アラビア数字で表記する。その際、百の位が変わらない場合は、省略すること。
- (6) 長い引用の直後にその引用について論じる場合には、字下げして段落を変えない。
- (7) 引用を1行以上省略する場合には、次の例のように、行の長さだけピリオドを打つ。さらに、戯曲の引用の頭書き (speech prefix) は、大文字で書き、最後にピリオドを打つことで示す。

RODERIGO. What, ho! Brabantio, Signior Brabantio, ho!  
IAGO. Awake! What, ho, Brabantio! Thieves, thieves, thieves!  
.....  
Thieves, thieves!  
*Enter Brabantio at a window above*  
BRABANTIO. What is the reason of this terrible summons?  
What is the matter there? (1.1.79-80, 82-83)

### 5. 注

- (1) 注は後注とする（「註」という表記は使用しない）。Word の脚注機能は使わずに、注番号を本文中の該当箇所（句読点の後ろ）に上付き半角数字で手入力した上で、本文と引用文献の間に、注番号順に注本文を入力する。その際、後注の番号は上付きにはせず、半角数字にする。数字の後ろには半角2文字分のスペースを取り、コンマやピリオドをつけないようにすること。
- (2) 注のなかで触れる文献の書誌情報は「引用文献」に譲り、注では括弧内傍証を用いて簡潔に記載する。以下は一例である。

初期近代イングランドにおける“counsel”と“council”という概念の交換可能性については、ジョン・ガイの論文を参照 (Guy 292-310)。

## 6. 引用文献

- (1) 引用した文献の一覧は MLA の Works Cited の書き方にならって論文の最後に「引用文献」としてまとめる。
- (2) 「引用文献」の書誌情報の書き方は、*MLA Handbook for Writers of Research Papers 7th ed.*に倣うこと。但し、出版された研究書や論文の最後に付ける“Print.”は削除すること。
- (3) 以下は書誌情報の表記の一例である。

### 研究書の場合（アメリカの州の名は、出版地情報に含めない）

Butler, Martin. *Theatre and Crisis 1632-1642*. Cambridge: Cambridge UP, 1984.

Hunter, G. K. *English Drama 1586-1642: The Age of Shakespeare*. Oxford: Clarendon P, 1997.

Rose, Mark. *Heroic Love: Studies in Sidney and Spenser*. Cambridge: Harvard UP, 1968.

安西徹雄、『彼方からの声——演劇・祭祀・宇宙』、筑摩書房、2004年。

スティーヴン・オーゲル、『性を装う——シェイクスピア・異性装・ジェンダー』、岩崎宗治・橋本恵訳、名古屋大学出版会、1999年。

### 雑誌論文の場合

Crane, Mary Thomas. “Linguistic Change, Theatrical Practice, and the Ideologies of Status in *As You Like It*.” *English Literary Renaissance* 27.3 (1997): 361-392.

Spivack, Charlotte. “Alienation and Illusion: The Play-within-a-Play on the Caroline Stage.” *Medieval and Renaissance Drama in England* 4 (1989): 195-210.

中野春夫、「四百年後、『リチャード三世』が面白い」『悲劇喜劇』65巻8号(2012年11月号)、36-37頁。

松田幸子、「王政復古の『宗教戦争』——*The Duke of Guise* における英仏の『パラレル』——」*Shakespeare News* 51巻2号(2012年)、26-37頁。

### 研究機関の紀要論文の場合（発行機関を明記する）

冬木ひろみ、「『物語』と終わりの感覚——『冬物語』一考察」、『演劇研究』（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館）第23号（1999年）、25-34頁。

### 論文集所収の論文の場合

Orgel, Stephen. “What is a Text.” *Staging the Renaissance: Reinterpretations of Elizabethan and Jacobean Drama*. Ed. David Scott Kastan and Peter Stallybrass. New York: Routledge, 1991. 83-87.

篠崎実、「イアーゴの呪縛——『オセロー』における反復の詩学と女性抑圧」、日本シェイクスピア協会編、『シェイクスピアと演劇文化』、研究社、2012年、25-42頁。

### 文学作品の版本の場合

Shakespeare, William. *King Henry VI Part 1*. Ed. Edward Burns. London: Thomson Learning, 2001.

### 文学作品の版本における編者の解釈に言及する場合

Hattaway, Michael, ed. *The First Part of King Henry VI*. By William Shakespeare. Cambridge: Cambridge UP, 1990.

野崎睦美、「解説」、ウィリアム・シェイクスピア、『尺には尺を』、小田島雄志訳、白水Uブックス  
(白水社)、1994年、187-200頁。

インターネット上に公開された電子テキストの場合（最後に情報の取得日を明記する）

Hill, Thomas. *The Profitable Arte of Gardening*. London, 1608. *Open Library*. Web. 21 June 2013.

1900年以前に出版された文献の場合（出版地と出版年を記載し、STCナンバーやマイクロフィルムの番号などは付けない）

Norden, John. *The Survaiors Dialogue*. London, 1607.